

この夏、しばらくインドネシアのバンドンに行っていた。串焼きの屋台などが並ぶ裏通りを歩いていると、みなさん足取りが比較的ゆつくりだという気がした。夜、たくさんの人通りがあっても、電力事情の関係で、通りはかなり薄暗かったのだが、そういう夜はもちろん、昼の間も、歩く速さは日本の関西人のほうが速いような気がした。いつもの調子で歩くと人を追い越していつてしまうのだ。

朝日新聞大阪本社版（二〇〇四年十月一日）夕刊に載っていた「都市別の歩く速度」の表（国際交通安全学会調べ一九七九年）によれば、マニラは秒速一・二四メートルなのにに対し、東京は秒速一・五六メートル、大阪は秒速一・六メートルだという（ちなみに、日本の中でも高松は一・三五メートルなので、すべての日本人が必ずしも速く歩くというわけでもなさそうだが）。バンドンの町で調査したデータは知らないが、やはり日本よりも遅いのではないだろうか。歩く速さといったことも、一種の生活様式であって、国や地方によって違うところがおもしろい。ただし、バンドンの町なかを走る自動車は、どちらかといえはわれ先に走っているという印象で、どの車も結構エネルギーで速かった。

「右手」というのがしみついてしまった。今でもだれかに何かを渡すとき、左手を使わないような意識がどこにある。

実は、左手＝失礼という図式にはトイレのことなどもかわっている。東南アジアのいなかのほうを旅行した人ならだれでも思い出すように、トイレの「大」のシステムが違っているのだ。きれいにするとき、日本では「紙」を使うが、向こうでは水で流すというシステムなのだ。したがって、トイレはたいいてい濡れている。いなかのトイレはほぼすべてそのシステムだったし、町なかのデパートでも、バケツに水がためてあって、ひしゃくが浮いているだけで紙はないというところがあった。水を使わないときれいではないという考え方だ（ちなみに、例のバンドン会議の会議場のVIPルームを見せてもらったが、大統領用のトイレには紙とともにおしり用のシャワーが備え付けられていた）。

諸情報を総合しつつもう少し詳しく言えば、「水で流す」「洗う」といっても、濡らすだけではおしりはきれいにならない。そこで左手さん登場というわけだ。考えてみれば全部自分の体なのだから、「きれい」も「汚い」もない。あとでしっかり洗えば「きれい」なのだ。

日本などでは、一般的には、汚い物は最初から触らないようにしよう、という考え方で、紙を使ったりする。しかし、「汚い手」を決めて、それをもっぱら使って、後で「洗う」とにしようという発想だ。「汚い」ものについても、とりあえずは接触しよう、というところに、ある意味でのナチュラルな潔さ（？）を感じてしまう。そして、他者とのやりとり

しぐさで日本と違っていたことはいろいろあるが、おもしろかったのが、手で食べることだった。食堂に行くときスプーンとフォークが出てくることも多いが、水のボールだけが出てきたこともあった。向こうのみなさんは、よく右手の真ん中三本と親指の爪側で上手に食べる。手で食べるほうがおいしい、ということであつた。なんと、ある学生などは、手で食べたほうが味がよくわかると言っていて、サンバルという唐辛子ソースを指で取ったときに、「ああ、手がからい」とボールの水で手を冷やしたり洗ったりしていた。すごい手だと思った。その手であるが、食事の手は必ず右手である。インドネシアでは、「左」は「汚いほうの手」である。ガイドブックのたぐいにも、「左手で人の頭に触らないよう」などと書いてある。よその子どもの頭を左手でなでている光景を目撃したこともあるが、本来はどうなのだろう。手で人に何かを示すときも右手であつた（ただし、向こうでは、親指をそのまま上に出して右手を握って、その親指を心持ち伸ばすようにして親指で指す）。物を渡すときも左手で渡すと失礼で、必ず右手を使う。左手を上腕に添えるのがいちばん丁寧なしぐさだ。たった一か月半の滞在だったが、「人に物を渡すのは

では右手を使うから、そのことで気分を害する心配はない。

それぞれの地域によって、いわば「体の使い方」に、それなりのルールがある。例えば、お酒を飲むときでも、韓国では、目上の人の前では、ちょっと横を向いて飲むほうが礼儀になつていいる。一方、中国では、乾杯のときに自分のグラスを相手より下に下げるほうが丁寧な場合が多い。ちなみに日本では、自分のグラスを高く掲げて、頭を下げるという乾杯をよくする。相手への礼儀の示し方が違っているわけだ。

同じ人間であっても、身のこなしや、身体部分に対する意味付けは、文化によつて違っている。異なるバックグラウンドの人のコミュニケーションにおいては、言葉そのものももちろん重要だが、そうした「言葉以外のコミュニケーション」についても留意する必要がある。いわば、「からだの文法」ということになるだろうか。「からだの文法」がある以上、国語の時間にも、言葉だけではなく、視線、身振り、表情などについても留意していくことが必要だという気がする。

さて、こうした体の動きは言葉にも関連する。イエスとノーだ。日本語では「問題ありませんか。」に対して「はい。ありません。」と答え、首も縦に振る。しかし、英語でもそうだが、インドネシアでは「いいえ。ありません。」というため、首は横にふる。当然、日本語を使って「はい。」と言うときは、体の動きと返事とが矛盾することになる。首を横に振りつつ、「はい。」という奇妙な動きとなるわけだ。「からだの文法」は意外に手強そうなのであつた。